

目が覚めた朝

ヤマダヒフミ

「サヨナラ。」

俺の魂は滅びたが何ものかは残っていた。今更、何を言う事があるだろう・・・この馬鹿野郎共ばかりの人生で・・・。どいつもこいつも知った顔をしてやがる・・・。

俺がこの世界を嫌悪するにはそれなりの訳がある。俺は生まれた時から、人間ではなかったのに、人間の皮を被せられて生きさせられてきたのだ。それで・・・だ。わかるか。

俺は人間ではなかった。なのに義だの、愛だの。俺には分からなかった。俺には人間の言葉は分からなかったが、鳥獣の言葉ははっきりと理解したのだ。

お前達がいつ、人間をやめるのか?と俺はわくわくしていた。お前達は俺以上に、人間の皮を被った、獣以下の俗物だと、俺の魂は絶えず俺に教えていたから、俺はわくわくと待っていたのだ。お前達はその事実を晒す瞬間を。

だが、お前達はいつまでたっても人間面をやめなかった。・・・それで俺は疲れた。それで今、こうやって俺の方から自白する羽目になった訳だ・・・。すまない、俺は人間じゃなかったのさ。俺は、そうさ。中世に作られた骸骨だったのだ。それでも・・・しゃれこうべにも、こうして言葉はあるというわけだ。

今、そのカラカラの乾いた口から、君達に一つ、真実を託宣してやろう・・・。君達は人間ではない。獣でもない。ましてや骸骨でもない。真鍮の扉の取手ですらない・・・。君達は・・・何ものでもないのだ。もう分かっている事と思うが・・・君達は自由や義務や権利などという俺には得体の知れない言葉を振り回している間に、この世界に溶けて分解して、個性性を失い、人間ではなくなっていたのだ。君達は妖怪だ。それもできそこないの。・・・それも三文の価値もない。汚物だ。地球にとっての。

君達は様々な破壊と、創造を成し遂げたと、主張するだろう。だが、俺の魂の中の頭のいかれた神は次のように言う。

「君達は湖の表面をほんの少しかき混ぜただけだ。すぐに元に戻る。」

天国への触手

「不幸は俺の神だった。」・・・そんな言語があるものだろうか?・・・この馬鹿共が、幸福を神だと仰いでいる世界で。

お前達の幸福は何だ、言ってもみろ。結婚か、財産か。名声か、地位か栄誉か。あるいは可憐な少女を犯す事か?それとも豪壮な男を心ゆくまで陵辱したあげくにお前の短剣で刺し殺す事か?・・・何だ、言ってみろ。それとも掲示板か何かで、永遠に呪いの声を上げている事か?・・・それがお前の幸福か。それがお前達にとっての、神なのか?

お前達の神を、今俺は何の抵抗もなく、踏みにじる。なぜなら、不幸は幸福よりも遙かに健康的であり、強壮でもあるからだ。・・・幸福とは病弱の印、病気と老衰の彼方・・・。人は、健康でありつつ、天国にいられる訳ではない。この世にあるありとあらゆる病院というものが一つ残らず、天国を模倣した地獄である所以だ。

お前は何か知っている?・・・言ってみろ。世界か、歴史か。どこぞの教科書で習った性行の方法か、ネットを覗いて発見した成功の方法か、それとも自分が神だと、幸福だと信じ込むための方法論か。・・・それとも、絶えず自分に言い訳するために与えられた様々な架空の知識か。何だ。言ってみろ。・・・一つ、残らず、俺が喝破してやろう・・・。そんなものは俺の地獄の前には取るに足らぬのだ。お前達の幸福など、俺の不幸・・・いや、地獄・・・そう、だからつまり俺というこの独自の存在にはかすり傷一つ与えられまい。俺は何はともあれ、存在しているが、お前達は一切存在していないからだ。お前達は幸福を願い、幸福となり、この現世を消滅させた。・・・という事はお前達は何だ?・・・妖怪以下か?・・・ただのゲテモノか?・・・いや、無だ。どんな虫けらも叶わなかった、「無」にお前達は成り下がったのだ。お前達に存在はない。俺は・・・不幸と引き替えに「俺」を手に入れた。・・・もはや、どうでもいいことだが。

ああ、ここから天国のラッパが聞こえる。どうやら、お迎えが来たようだ。お前達とここで出会う事は二度とないだろう。お前達は幸福に導かれて永遠の地獄をさまよひ、俺は俺の不幸に導かれて・・・おそらく未明の暁に、そしてやがては天国に到達することだろう。

高校生一年生の朝

俺は絶対に参与する方法をいつでも探していた。・・・それで見つけたのだ。宇宙の未明の入り口を。

そこに入れば、かつての世界はもうガラス玉の中の小宇宙でしかなかった。・・・俺は眺めた。かつて、俺をなじり、罵倒し、刺し殺そうとした人間がいかにも濁った視線で自動販売機の明かりを目当てに歩いていく姿を。そして俺の親が路頭に迷い、人々が意識せずとも自らの精神の迷路に入り込み、そこで朽ちていく姿を。そして、俺のかつて愛した人々が、無惨にも独裁者達の手によって、殺されていく姿を、俺はガラス玉の目玉で、しっかりと眺めた。

・・・と、そこにもう人はいなかった。残されていたのは、きれいな真鍮の玉だけだった。パチンコ屋にでもおいてありそうな奴だ。・・・そこには俺の似姿が映っていて、そいつは次の瞬間にはもう俺に語りかけていた。

「お前は誰だ？」

「俺は・・・俺だ」

「なら、入れ替わろう。今日から、俺が「お前」だ。」

こうして、俺は「お前」となり、お前は「俺」となった。こうして、この世界に一大転機が訪れた。俺は全てを失う事によってこの宇宙を手にし、奴は・・・奴の事なんてどうだっていい。奴は、別の宇宙に消えてしまったんだ。

俺は精神の眼で全てのものを眺めた。人間はどこにもいなかった。そこには宇宙の創世の秘密や、神が造った真実がちらついていたのだが、俺の目に映ったのは、なんととっても、あの天の川の美麗だった。俺は天の川の水をすくって、足下にそっとかけた。俺の足は膝下から順番に透明になっていき、そしてやがて・・・俺は消えたのだ。

こうしてまた一大転機が訪れた。・・・俺がふと眼をさますと、俺は一人の高校一年生の男子となっていたのだった。

出発と倦怠

さあ、出発だ。俺の魂は牢獄だから、今のお前達にも、よく見える事だろう。

この世界が腐った海に浮かんでいるまん丸い青い球体だとしても・・・お前達はなに一つ、見る事も聞くこともできないだろう・・・。それがお前達の本性だからだ。

俺は見た。あらゆるものを。俺は聞いた。あらゆる音を。・・・そうして、自分で自分に飽いてしまったのだ。お前達はどうか?・・・まだ、可愛いあの子か、格好いいあの彼に憧れているのか?・・・言ってみろよ。今更・・・嘘をつく必要もないはずだ・・・。

お前はなにものだ?・・・なにものでもない。俺はなにものだ?・・・なにものでもある。どっちもが答えであり、どっちもが問いでもある。お前達は問うた。古い昔、古代の壁画や偶像を使って。俺は答えた。お前たちの額に・・・「死」の一字を、俺の血の墨汁でなすりつけたのだ。

今、俺は出発する。何の遲疑も、逡巡もなく。俺は「死海」の群れの中に入り、鸚鵡共の世界の中に、傷つく事を恐れずに没入する。

そして人間世界から去るのだ。

神の問い

俺は、世界が厳かに終わっていく姿をじっと見つめていた。それは丁度遠大な交響曲のフィナーレに似ていた。モーツァルトもベートーベンも、真っ青なくらい奴だ。

そうやって世界は終わっていった。人々はそんな最中にも、相変わらず愚痴と文句を言い続けていた。あれが足りない、これが足りない、もっともっと・・・私達は恵まれていないのだ!!・・・そうやって、もっとも恵まれているものももっとも恵まれていないものも同じ様な顔であの大洋の彼方に沈んでいった。

あれが足りない、これが足りない・・・・・・・・・・。

さて、今、神が世界を再興するに当たって、そんな人間共を造物主たる神は再び造ると、君は思うだろうか？

肉眼

俺の孤独は世界を覆った。世界はなにものでもなかった。俺は独りだった。

乾いた大河を、非情な河が流れていく。見えるものには見え、見えないものには見えず。

あらゆるものを嘲笑する乾いた言辞をお前達は手に入れた。・・・科学的言語という奴だ。・・・

・ 剃刀の刃は確かによく斬れるだろう。石には負けるのだが、結局は。

お前達は誰だ?・・・鏡を見た事があるか?・・・自分の本当の相貌が映ると言われる、あの迷宮の奥に厳かに設置されたあの鏡の中の自分を、お前達は覗いた事があるのか?本当に?本当か?お前達は本当か?本物か?本当に存在しているのか?手を見て見ろ?乾いて、透けてないか?後ろの、背景が映ってやしまいか?

俺は一度も、お前達の内一人でも、この肉眼に映った事はなかった。

王の死

俺は土下座をしたり、泥水をすすったりした。・・・貴様らのために。それでも貴様らは俺を許さなかったから、俺は片っ端から貴様らを血の海に叩き込んだ。・・・すると、貴様らは、血の海の中で光っている俺の王冠を讃え始めた。こうして、俺は最初の王となったのだった。

俺はさんざん貴様らを馬鹿にし、慰みものにし、殺し、陵辱した。すると貴様らは益々俺を賛美し、逆に、俺が貴様らに自由と責任を与えてやると、貴様らはすぐに俺を吊し上げようとした・・・。

今、俺は天空の塔の尖頂に立って、世界を見回す。・・・ああ、貴様らと違って、この大空だけは俺のものだ。俺はその事を、王の視点で確認する。・・・この大空だけは、どうやっても俺の手に余る代物。だからこそ、初めて俺を抱く女となるのだ・・・。

俺は塔の先端から、縊れて落ちた。

コヨーテから始めて

長い夜の果てに俺の孤独が横たわっていた。誰も彼もが歌を歌っていた。それもとびきり陽気な歌を。

コヨーテの遠く長大な遠吠えが闇夜にこだまする時、俺の魂もまた目覚める。俺は歯を磨くために全世界を捨ててから洗面台に向かう。そこには俺の顔が映っている。髭はぼうぼうで、目は血走り、頬は痩せこけている。三日ほど何も食べていない。俺は死ねなかったのだ……。

と、そこでまたコヨーテの遠吠えが聞こえる。奴め、どこで鳴いているのだ……。俺は顔を洗い、歯を磨き、サンドイッチと牛乳の朝食を取る。こうして再び、世界が俺の眼球の奥に押し込められた。

俺は生きていた。全く不思議な事に。

目が覚めた朝

<http://p.booklog.jp/book/61064>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61064>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61064>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ